（管理規則第３条実施要領　別紙様式）

２０２５　年度（令和７年度）学校評価自己評価表

一ツ橋中学校区	校番　１２	福山市立引野小学校
	最終更新日	2026年（令和8年）2月28日

Ⅰ　福山市

ミッション	福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。
ビジョン	各中学校区・学校が、資質・能力の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、 日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。

Ⅱ　中学校区

前年度学校関係者評価の主な内容

児童・生徒に活躍の場を提供し、目標達成に向けて着実に取組が進められている。

地域の学校として、現状や課題を共有しながら、活力ある学校づくりを共に進めたい。

児童生徒の現状

不登校や登校渋りが微増傾向にあり、取組を継続している。

探究的な学習について校区で推進しており、その中で、児童生徒が自ら問いを立て探究する姿が増えてきている。

育成する資質・能力	「学びに向かう力」「課題発見・解決力」「対話する力」「自己・他者理解力」「自己効力感」
めざす子ども像（義務教育修了時の姿）	自己を認識し，自分の人生を選択し，表現することができる力を身に付けている。
中学校区として統一した取組等	小中合同の「自ら考え学ぶ授業」を実践するための研究授業を通して、全ての児童生徒が主体的に学ぶことができる学校をめざす。 探究的な学習の充実に向け，小中で連携して、９年間のカリキュラムを構想するとともに、「子ども主体の課題設定」「机からの脱却」（外部連携を含む）を視点にした取組を行う。

Ⅲ　自　校

ミッション

「児童が主体となる学び」を教材・児童の変容から見直し、実感的な成果や成長を児童・職員が共有できる学校をつくる。

学校教育目標

心豊かでたくましく　自ら考えて行動できる子どもの育成

現　状

＜児童＞

全教育活動における課題発見・解決的な学び、自己や集団の成長を振り返る活動の継続により、自己肯定感が向上している。しかし、自分の考えを持たないまま少人数の活動に参加したり、少人数では思いを出しても全体には伝えられなかったりと、学習者として十分自立していない児童がいることが課題である。

＜授業＞

「子どもの言葉から」を視点にし、授業づくりは広がりつつある。しかし、実を伴った学びにはつながっていない。その要因として、次のことがあげられる。

・単元でつけたい力を意識したファシリテートが不十分
・自立した学習者にするための手立てが不十分

今後、理論研修だけでなく、教材研究を深める研修を取り入れながら、誰もが児童の成長や変容を実感する授業改善に努めていく必要がある。

授業改善を進めることが児童の「意欲や自己有用感」を育み、児童の笑顔が教師の「授業づくりの楽しさややりがい」につながる。好循環を生み出すための授業研究に取り組むことで、働きがいの向上を図る。

育成する資質・能力		課題発見・解決力	学びに向かう力	自己・他者理解力
めざす子ども像	低学年	「なぜ？」「どうして？」から問いを見出し、進んで取り組んでいる。	課題を見つけ最後までやりきろうとしている。	自分や友達の良いところに気づいている。
	中学年	課題解決のための方法を考え、解決のスキルを活用して、主体的に解決している。	課題を見つけ、自分で決めたことを粘り強くやり遂げている。	自分や友達のよいところを見つけ、良さや成長を互いに認め合っている。
	高学年	課題解決のためのよりよい方法を考え、解決のスキルを活用して主体的に解決している。	課題を見つけ、様々なことに挑戦し、粘り強くやり遂げている。	互いの個性や成長を認め合い、学び合いを通して、自己有用感を高め挑戦しようとしている。

研究	テーマ	**主体的に問いを見出し、探究活動を通して、資質・能力の向上を図る**
	内容等	児童が学びを「デザインする」探究的な授業づくり
めざす授業の姿		＜子どもが、問い続け、学び続け、授業づくり＞ ～「なぜ？」「どうして？」「やってみたいな」「伝えたいな」が生み出される学習方法の見直しと学びの過程の充実～ ○　子どもが「なぜ？」「どうして？」と問い続け、探究する授業 ○　子どもが学びをデザイン（選択・発信・交流・改善）する授業 ○　子どもが「試してみたいな」「みんなに伝えたいな」と、わくわくして学びに向かう授業と教材の開発 ○　子どもが自己の成長や変容を実感する授業

Ⅳ　目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立引野小学校

年目	中期経営目標	重点	分類	短期経営目標	目標達成に向けた取組	評価指標	中間評価（10月1日） □指標に係る取組状況	プロセス評価	達成評価	改善方策	最終評価（2月末） □指標に係る取組状況 ◎短期(中期)経営目標の達成状況	プロセス評価	達成評価	総合評価	改善方策
2	自ら考え学ぶ授業の推進	★	継続	探究学習を通して、児童の思いや発想を基盤に単元を作り、資質・能力の向上を図る	・生活科、総合的な学習の時間を中心に、探究し続ける単元の計画・実践 ・学びの質を向上させる教材研究・研修（評価・改善）の定期的実施	・児童アンケート「おもしろい・成長を感じる」等の項目で肯定的評価80%以上 ・単元末評価問題の正答率４０%未満(低学年は６０%未満)の児童の割合が１０%以内	・児童アンケート「おもしろい・成長を感じる」等の項目で肯定的評価は８２%だった。 ・単元末評価問題の正答率４０%未満(低学年は６０%未満)の児童の割合は９%だった。	４	４	・児童が主体的に問いをもつような探究学習になるように、授業研究や研修を充実させ、実践を共有していく。 ・単元末評価問題の正答率が低かった問題を取り上げ、間違えた原因や指導方法を考え、授業改善に生かしていく。 ・ＣＢＴテストを導入し、新しい学び方を増やしていく。	・授業研究や研修を充実させたことで、児童アンケート「おもしろい・成長を感じる」等の項目で肯定的評価は８７%だった。 ・教員間で正答率が低かった問題の共有をし、指導方法を考えたことで、単元末評価問題の正答率４０%未満(低学年は６０%未満)の児童の割合は9．9%だった。	４	４	４	・児童の思いや発想を基盤にして、単元の計画を練りなおし、児童が主体的になるような探究学習にしていく。 ・児童の理解度に応じた課題や宿題を取り入れていき、学力の定着を図る。。
1	自己指導能力を育む教育活動の推進		見直し	児童主体の活動を通して、自己指導能力と共感的人間関係を育む	・児童が学校の課題を考え、取組内容を決めて改善を図る活動の実施 ・児童の発想を活かした異年齢集団の活動の実施	・児童会の選択した項目の振り返りが向上した児童の割合８０%以上 ・行事等の異学年交流での振り返りに自他の良さが書ける児童８０%以上	・１ 学期児童会主催で全校での学校かくれんぼや一迎会、エコ週間の取組みを行った。 ・前期児童会の取組みを通して、自分の生活習慣を見直したり縦割り班で楽しく関わり合えたりできた児童の割合は全校で８４%だった。	３	３	・２ 学期の行事を通して自他の良さを書けるようにし、学年をこえてお互いに見合える時間を確保する。 ・引き続き、児童会の子どもたちの意見を尊重しながら様々な取り組み振り返りを行う。	・児童会の公約に合わせた取り組みを行い、児童会の選択した項目の振り返りが向上した児童の割合は８３%以上となった。 ・行事等の異学年交流での振り返りに自他の良さが書ける児童は87%以上となった。	３	４	４	・児童会での取り組みを行った後の振り返りをこまめに行い、より良い改善策を児童と一緒に考えさせる機会をつくる。 ・他学年の良さを紹介共有し合う時間を確保する。
1	子ども主体の健康・体力つくりの推進		見直し	体力向上・メディアコントロールの自発的取り組みを通して、生活改善と、体力・健康づくりを図る	・学期1回のメディアへコントロールの学習と、生活ふり返りの実施 ・自分に合った目標設定をし、体力向上を図る持久走・縄跳びの取組の実施	・学習結果をもとに、自分の生活の振り返りを書ける児童８０%以上 ・持久走・縄跳びの取組で、自己目標の達成率が70%以上	・１学期のメディアコントロールを通して、生活振り返りが書けた児童が90%であった。 ・１学期中に、メディアコントロールウィークとメディアと健康について教室での学習を1回実施。	３	３	・メディアとの適切な関わり方や時間の使い方について児童自身が考え、主体的に行動できるような取組を進めていきたい。 ・個人カードやチャレンジシートを活用し、持久走や縄跳びの記録を見える化する。小さな目標を設定し、達成の積み重ねを実感できるようにする。	・メディアコントロールウィークと教室指導を学期に１回、計３回実施した。生活の振り返りをかける児童の平均は、81%だった。 ・記録を見える化し、持久走では、73%、縄跳びでは 87%の達成率となった。	４	４	４	・提出方法を簡素化するとともに、個別の声かけで参加率の向上を図る。 ・児童が自分の技量に合わせてより現実的な目標設定を行うことができるようにする。
1	地域連携・働き方改革の推進		新規	校区の強みを生かした教育活動により、郷土愛の育成と教育環境の改善を図る	・地域人材等を活用した教育活動の積極的実施 ・教育活動の向上や働き方の改善につながる支援体制の構築	・地域と学校が連携を行った回数（教師・児童）を年間で５０回以上 ・地域への聞き取りや連携をもとに、質の向上や働き方改革を図った取組が、年間3回以上	・１学期中に地域と連携した回数は全学年で６９回であった。 ・毎週火曜日の教材研究日の取組と、週に１回の定時退校日の取組を行った。	４	４	・地域との連携を継続し、地域の良さや強みを児童が見つけ、発信していけるように探究を行っていく。地域連携を１００回以上行う。 ・教材研究を他の職員と共に行うことで、経験や知識の共有化を図ったり、他学年の学びを生かしたりできるようにする。	・年間で２１３回地域と連携を行うことができた。次年度へ向けても、子ども発の取り組みを地域と連携しながら行う。 ・児童下校後等、教材研究の日以外でも、職員間の連携が行えており、管理職を中心に、教材教具の工夫等の相談ができていた。	４	４	４	・今後も、地域連携を行いながら、児童発の探求学習を継続していく。 ・学年間だけでなく、職員全体で、お互いの経験や知識を伝えあいながら、より児童実態に合わせた学習を行っていく。

［プロセス評価の評価基準］

評点	評価基準
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。

［達成評価の評価基準］

評点	評価基準
5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。
4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。
3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。
2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。
1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。

［総合評価の評価基準］

評点	評価基準	
5	１００%以上の達成度	十分に目標を達成できた。
4	８０%以上１００%未満の達成度	概ね目標を達成できた。
3	６０%以上８０%未満の達成度	ある程度目標を達成できた。
2	４０%以上６０%未満の達成度	あまり目標を達成できなかった。
1	４０%未満の達成度	目標を達成できなかった。